

2011年度 第1回水工学委員会 議事録

日時： 2011年7月28日(木) 16:30～19:35

場所： 土木学会 EF 会議室

出席者： 寶馨(委員長)、道奥康治(副委員長)、篠田成郎(幹事長)、大石哲(編集幹事長)、天野光歩、泉典洋、大槻英樹、沖大幹、川越清樹、神田佳一、榊山勉、清水康行、鈴木正人、立川康人、近森秀高、藤堂正樹、泊宏、中北英一、中嶋規行、原田守博、渡邊康玄、浅沼順、天野邦彦、石平博、今村正裕、風間聡、門田章宏、神田学、清水義彦、関根正人、田中規夫、田中昌宏、戸田祐嗣、中津川誠、二瓶泰雄、藤田一郎、矢島啓、横山勝英、堀田哲夫(オブザーバー) [敬称略]

議題：

- 水工学委員会委員長挨拶(寶馨 委員長)：議事開始に先立って、寶委員長より就任の挨拶があり、今後の委員会が取り組むべき課題として、東日本大震災への対応、論文集との連動、国際化、水理公式集の改訂等が挙げられた。また、新たな取り組みとして、委員会資料の Web 閲覧による会議のペーパーレス化についての説明と協力の要請があった。
 - 各委員の自己紹介があった。
 - 委員会資料の Web 閲覧方法について、篠田幹事長より説明があった。
- 以上の後、引き続き以下の事項についての審議が行われた。

《報告事項》

1. 水工学委員会構成(篠田成郎 幹事長)

- 今年度からの変更点を中心に構成図を使った説明があり、以下のような報告があった。
 - 地球環境委員会の水工学委員会からの委員を、中北委員(地球環境水理学小委員会委員長)に依頼した。
 - 東南アジア河川流域研究小委員会の委員長は未定である。
 - 水理・水文解析ソフトウェアの共通基盤構築に関する小委員会は、昨年度で小委員会の目的を達したために、水工学委員会内での活動は終了し、別の場所で活動を継続することになった。
- 寶委員長より、今後、必要に応じて若干の追加変更もあり得るとの補足があった。

2. 水工学に関する夏期研修会(2011・広島大学)について(矢島啓 委員)

- 矢島委員より、本年度8月29日、30日の両日、広島大学で開催される水工学に関する夏期研修会に関する報告があった。
- 昨年度の研修会における参加者へのアンケート結果等から、以下のような傾向・問題点が報告された。
 - A, Bいずれのコースも参加者が減少傾向にあり、努力が必要である。
 - 参加者の研修内容への満足度は高い。
 - お盆の時期の開催は避けてほしい。
 - 開催場所と時間については、遠隔地から来る参加者の都合も考慮してほしい。
 - 現在は、AまたはBのいずれか一方のコースしか選択できないが、一方ではなく、両方のコースの研修を受けることのできるようにするなど、柔軟に対応してほしい。
 - 参加費(13,000円)は高過ぎるのではないか。
 - 講義資料等(pptファイルなど)を公開してほしい。

3. 全国大会研究討論会について(立川康人 委員)

- 題目は「水理・水文解析ソフトウェア統合型共通基盤の活用と普及に向けて」とし、水理・水文解析ソフトウェアを定着させて行くためには何が必要かについて議論することにした。
- 今後予定されている水理公式集の改訂にともなう例題プログラム集の改訂との関連についても考慮する必要がある。
- 震災対応についても考慮する必要があるかもしれない。

- 討論会メンバーについては、今後検討する必要がある。
- 開催日時は、全国大会初日を予定している（9月7日、16:15～17:15）

4. 水シンポジウム（京都）について（篠田成郎 幹事長）

- 篠田幹事長より、8月11日京都で開催予定の第16回水シンポジウムについて、机上配布されたチラシに基づいて、開催内容についての紹介があった。
- シンポジウム実行委員会より、展示パネルセッション（8月11日、9:30～17:00）への展示物の提供依頼があったとの報告があり、各委員へのパネルの提供依頼があった。依頼内容およびその後の議論の詳細は下記のとおりである。
 - 震災関連の内容。
 - 単なる写真で可。既にパネルになっているものでもよい。ポスターセッションのポスターのように「画像+説明」が望ましい。
 - パネルの総数は12個。サイズは横90cm、縦200cm程度。
 - パネルを提供できる委員は、まず幹事長に連絡すること。送料は実行委員会が負担する（ただし、発送時は立替を依頼）。
 - 幹事長から、震災調査団の田中仁志団長（東北大）に資料提供の可能性について問い合わせることになった。

5. 各部会、小委員会の活動報告及び活動計画

a) 水文部会（神田学 部会長）

神田部会長より下記のような報告があった。

- 昨年度の活動内容
 - 第1回部会、北大、9月2日；研究集会、球磨川流域、9月12日～14日；第2回部会、東大、3月10日
- 今年度の活動計画
 - 第1回部会、愛媛大、9月9日；研究集会、富山、10月21日～23日；第2回部会、日時・場所未定
- 部会委員の2名程度の交代

b) 基礎水理部会（富永晃宏 部会長）

富永部会長より、下記のような報告があった。

- 今年度からの新体制について
 - 部会長：富永晃宏、名古屋工大；副部会長：大本照憲、熊本大；
 - 幹事長：内田龍彦、中央大；ホームページ担当：高橋正行、日本大学
- 昨年度の活動内容
 - 河床変動フリーソフト iRIC 説明会（土木学会、4月22日）
 - 第4回シンポジウム（土木学会、12月6日）
 - 部会見学会（黒部川、9月29日）
- 今年度の活動計画
 - 水シンポジウム第1分科会（京都、8月11日）のテーマおよび内容
 - 第5回基礎水理シンポジウム（土木学会、12月5日）の内容
 - 部会見学会
 - 十勝川の破堤実験の見学は各自個別参加とし、9、10月頃に新たな河川見学を企画したい。可能であれば若手の参加（学生も含む）を募る。
- 部会委員の交代

c) 環境水理部会（二瓶泰雄 部会長）

二瓶部会長より、下記のような報告があった。

- 昨年度の活動内容
 - 研究集会（群馬県草津温泉、7月2日・3日）
 - 流域圏シンポジウム（第1回）（東京理科大、12月15日）
 - 部会（2回；土木学会年次学術講演会、水工学講演会の時）
- 今年度の活動計画

- ・ 研究集会（鳥取県，7月7日～9日，終了）
- ・ 流域圏シンポジウム（第2回）
（場所未定，12月を予定，世話人：山口大学・赤松先生，沿岸環境関連学会連絡協議会と共催の予定）
- ・ 部会（2回；土木学会年次学術講演会，水工学講演会の時）

d) 河川部会（泉典洋 部会長）

泉部会長より下記のような報告があった。

- ・ 「2010年度 河川技術に関するシンポジウム」の報告とりまとめ
オーガナイズドポスターセッション（OPS）の中から話題性のあるものを選んでとりまとめ，河川部会のホームページに掲載した。
- ・ 河川部会会則等を制定し，水工学委員会からも承認を得た。
- ・ これまでのシンポジウムにおける議論の継続集積型活動の一環として，3つのWGを設置した。
- ・ 2011年シンポジウムの開催（東京大，7月23・24日）
 - ・ 震災に配慮して開催を1ヶ月延期した。参加者は355名で，昨年度より若干減少した。土日に開催したためと思われる。

e) 地球環境水理学小委員会（代理報告：篠田成郎 幹事長）

篠田幹事長より以下のような報告があった。

- ・ 第23回アゲールシンポジウム（東京大，3月8日）は，国際的取り組みを中心とした内容で開催された。
- ・ 小委員会の課題・報告性に関する山下前委員長の意見が紹介された（幹事長取り纏め）
 - ・ 小委員会の必要性
 - ・ 小委員会の課題：水工学委員会の下部組織でよいのか？ 活動経費，アゲールシンポジウムのあり方
 - ・ 期待される活動：気候変動と水環境に関わる研究，国際共同研究およびその支援，気象・水文・地下水・海洋の分野が連携した気候システムに関する議論，JICA-JSTの地球規模の課題研究，海外との連携シンポジウム，アゲールシンポジウムの英語化

この後，小委員会のあり方についての以下のような議論があった。

- ・ アゲールシンポジウムは，以前から水工学委員会の下で行われてきている。他の機会にシンポジウムを行ってはどうか（委員長）
- ・ 地球環境委員会との関係について，これまでも議論が行われてきたはずである。山下前委員長の意見どおりにやろうとすると，地球環境委員会との関連が出てくるはずである。
- ・ 地球環境水理学小委員会の問題とは別に，水工学委員会内での各小委員会のあり方は考える必要がある。
- ・ アゲールシンポジウムに一本の軸（一貫したテーマ）はない。その時々委員長に任されている（中北）。シンポジウムを止めることを考えてもよいかもしれない。委員会内で，今後シンポジウムをどのように行うかを議論していく必要がある。
- ・ 地球環境水理学小委員会の人数（メンバー）がはっきりしない。再構築の必要があるのではないか。
- ・ 地球環境水理学小委員会の活動が見えにくくなっており，立て直しの必要があるのではないか
- ・ 土木学会から求められている国際化への対応については，地球環境水理学小委員会も該当する（委員長）
- ・ 地球温暖化に対する適応策への対応を各省庁がやり始めている。水工学的立場，環境水理学的立場から研究・情報交換をやってはどうか（委員長）？

これらの議論を踏まえ，中北委員長に対応を依頼することになった（幹事長）

f) 東南アジア河川流域研究小委員会（篠田成郎 幹事長）

幹事長より，現在，小委員長が未定であること，東南アジア河川流域研究小委員会の今後の活動について幹事会で議論されたが結論出なかったこと，について報告があり，この後，以下のような議論があった。

- ・ 次期委員長は，実際に現場（東南アジア河川）で研究をしている方が良いのではないかと？

- 委員の中に適任者がいない場合は、外部に依頼することも可能である（委員長）
- この委員会は、国際化対応のためにも重要である。
- 8月中には委員長を決定したいので、自薦・他薦を希望する。

g) ISO/TC113 小委員会（堀田哲夫 委員長）

堀田委員長より、小委員会の目的とこれまでの活動の概略について説明があった。

- 昨年度の活動内容
 - 水文観測データ伝送システム（ISO/TS 24155, Telemeter System）の IS 規格への格上げ手続きの実施（WG 会議開催）
 - 他幹事国による関連規格の作成、改定などに当たっての意見照会、投票等への対応
 - 今後の ISO/TC113 対応組織体制の検討（本省河川情報対策室（五道室長）と討議）
 - ISO/TC113 総会（1. 5年に一度開催、アメリカポートランド、10月）への代表者の派遣と討議
 - 土木学会「ISO 対応特別委員会」への活動報告
 - 日本規格協会による「国際標準化活動実績及び活動計画の調査」への回答
 - 経済産業省による平成 23 年度標準化ニーズ調査「国際規格回答原案作成」及び「重点 TC 等国際会議派遣」に関する調査への対応
- 今年度の活動計画
 - 水文観測データ伝送システム（ISO/TS 24155）の IS 規格原案の作成
 - 堰等を用いた開水路流量計測（ISO1438-1 その 1: 刃形堰による流量観測）へのわが国案の提案
 - 意見照会、投票等への継続的対応
 - わが国が不利にならないよう、国際事務局での規格作成、改定等の状況をウォッチしていく

なお、近年の活動状況について、予算的措置がなくなっており、ボランティア的に活動しているとの報告があった。これを受け、以下のような議論があった。

- ISO 対応特別委員会では、現在は喫緊の課題はない。ただし、ISO に関わる国際的動向は把握しておく必要がある（例えば、中国の動向など）。今のところ、出てきた課題に対して WG を作って検討する、といった対応をとっている。
- 日本独自の研究開発があれば、わが国に有利になるように動いて行く必要があるのではないか。
- 水工学委員会からは堀田委員長だけしか参加していない。他の委員は必要か？…現在、取扱が必要な課題は特にないので、次の機会に。
- 継続性は重要。堀田委員長だけが携わっているのは、活動が継続できなくなるのではないかと？
- 何か問題がありそうであればアクションは起こす、というのが水工学委員会の基本方針である（受動的対応）。
- 国際的水事業に関わってくると「基準」が重要になってくるが、今はまだそういった動きはない（委員長）
- 必要に応じて、水工学委員会から委員の推薦等をおこなう。

h) 流量観測技術高度化研究小委員会（寶馨 委員長）

前小委員会委員長の寶委員長より、以下のような報告があった。

- 水文流出と河川における河道流の追跡に関するの観測技術の高度化について取り組んできた。
- 中でも、融雪出水の精度が課題であったが、これについては十分に組み込まなかった。
- 藤田一郎先生に今年度の小委員長就任を依頼し、承諾していただいた。
- 流量の計測精度の比較が重要。
- 融雪出水の流量観測がしやすいサイトの紹介について依頼があった。
- 小委員会のメンバー募集について依頼があった。

i) 水理・水文解析ソフトウェアの共通基盤構築に関する小委員会（立川康人 委員）

立川委員より、以下のような報告があった。

- 昨年度の活動内容
 - 5回ほど運営に関する幹事会

- ・説明会を2回，演習セミナーを2回，講習会2回を開催した．この他，CommonMPの利用と応用に関する講演を1回行い，土木学会研究討論会も実施した．
- ・CommonMP 関連ソフトウェアは，Ver 1.1 も既に完成している．
- ・テキスト「CommonMP 入門」（技法堂）を発刊した．
- ・利根川の基本高を，CommonMP を用いて算出し，この作業が CommonMP を用いることにより短期間で可能であることを示した．
- ・水理・水文解析ソフト共通基盤に関する小委員会の任務は終了した．
- ・小委員会の仕事は昨年度いっぱいまで完了し，仕事の一部は CommonMP のコンソーシアムで行われることになった．土木学会はコンソーシアムのメンバーである．
- ・CommonMP はボランティアベースで，現在約30名程度のメンバーで構成されている．他の学会員も参加可能である．

j) JHHE 編集小委員会（代理報告：篠田成郎 幹事長）

篠田幹事長より，以下のような報告があった．

- ・小委員会メンバー16名の紹介があった．
- ・出版状況
 - ・ Vol.29, No.1：2011年5月出版，掲載数10編，総ページ数149ページ
 - ・ Vol.29, No.2：2011年11月出版予定，掲載数4編程度の見込み
- ・査読状況
 - ・ 査読中原稿：2編，掲載決定論文：2編，再査読原稿：0編，返却論文：0編
- ・水工学論文集第55巻からの推薦論文を25編選定し，7月末日を締め切りとして投稿依頼中
- ・International journal が発刊されるまでの期間は，従来どおりに編集作業を進める（International Journal の状況については，別途「その他」のところで議論する）．

6. その他

a) 東日本大震災津波調査団の報告（田中則夫 調査団副団長）

- ・下記の5グループで調査が行われた．
 - グループ1：津波の河川遡上と氾濫に関する現象，津波氾濫と地形変動
 - グループ2：河川堤防の被災（津波遡上，氾濫による），漂流物による河川構造物被害，家屋流失の水工学的検討（家屋流失限界），防潮林などの植生の減災効果
 - グループ3：斜面崩壊等，土砂災害
 - グループ4：避難システム，避難の実態と教訓
 - グループ5：北海道地区における上記該当項目
- ・調査は既に実施しており，今後も継続する予定である．
- ・調査報告書は既に Web に公表している．
- ・今後は報告会の開催や，報告書の刊行を予定している．

幹事長から，水シンポジウムに各グループからパネルを提供してもらえないかと依頼があったのに対し，調査団長と相談してみるとの回答があった．

b) 国際水圏環境項学会（IAHR）の近況（代理報告：篠田成郎 幹事長）

篠田幹事長から，以下のような報告があった．

- ・新理事として（任期：2011年から2年間），小尻俊晴先生（アジア・太平洋地区理事），田中仁志先生（地区部会委員長）が就任された．
- ・橋本晴行先生（九州大），林健二郎先生（防衛大）の論文が，17th Harold J. Schoemaker Award ((Best Paper Award: Journal of Hydraulic Research)を受賞した．
- ・次のアジア太平洋地区国際会議は以下のとおりであるとの報告があった．
 - ・日時：2012年8月19日～22日
 - ・場所：韓国，済州島（Jeju-do, Korea）
 - ・概要締切：2011年9月30日
- ・次の世界大会は以下のとおりであるとの報告があった．
 - ・日時：2013年9月8日～13日

- ・ 場所：中国，成都
- ・ 概要締め切り：2012年11月30日
- ・ IAHR への入会依頼があった。

c) 沿岸環境関連学会連絡協議会対応 WG 報告（二瓶泰雄 委員）

二瓶委員より，今年度の活動予定として，流域圏シンポジウムの開催に関する紹介があった（環境水理部会からの報告で，すでに紹介済み）。

d) 禰津先生の紫綬褒章受章の紹介（代理報告：篠田成郎 幹事長）

幹事長より，京都大学の禰津家久先生が紫綬褒章を受章されたとの報告があった。

- ・ 工学系では珍しく，特に土木系では 2007 年に東大の藤野陽三教授が受賞されているだけである。我々水工学研究者にとっても名誉なことであり，心から祝福したい。
- ・ 水理学の基礎的な研究が評価されたことは，水工学の未来を担う若い研究者を大いに勇気づけるものである。

《協議事項》

1. 平成 23 年度の年間スケジュールについて（篠田成郎 幹事長）

幹事長より提案があり，異論なく承認された。

2. 第 56 回水工学講演会の開催について（愛媛大学）（門田章宏 委員）

門田委員より，第 56 回水工学講演会について（愛媛大学，2012 年 3 月 6 日～8 日），会場や開催内容についての紹介があった。

交流会の会費について議論があり，学生については安くすることになった。

3. 第 57 回水工学講演会の開催について（篠田成郎 幹事長）

幹事長より，第 57 回水工学講演会の開催場所について，通常は東京の番であるが，震災等の影響や宿泊・交通の便等を考慮すると適切な場所が見つからないので，幹事会で，第 57 回は前倒しして名古屋とする案が出されたとの報告があった。

名古屋開催について議論の結果，名城大学での開催が提案され，この方向で話を進めることとなった。

4. 水工学に関する夏期研修会（2012・水工学委員会担当）について（篠田成郎 幹事長）

幹事長より，2012 年の夏期研修会は，水工学委員会が当番である（海岸工学委員会と交代で担当している）との報告があり，2012 年の研修会について以下のような議論があった。

- ・ 地域開催のニーズを踏まえる必要がある。
- ・ 社会貢献についても考慮する必要がある。
- ・ アンケートの結果，満足度は高い。
- ・ 現地見学会を実施してはどうか？
- ・ 開催時期として，若手が集まりやすい水工学講演会前後に入れる方法も考えられる。
- ・ 水工学・海岸工学以外の項目も入れてはどうか。
- ・ 幹事会における意見として，まず，講習会の継続は不可欠である。
- ・ 次期の開催場所を先に決定し，今後内容をどうするかについて検討してはどうか？
- ・ 次期開催候補に北海道（札幌）が挙がっており，北大は受諾の方向にある。
- ・ 参加費を抑えることについて検討していく必要がある。具体的な方法として，印刷代，講師への謝金を抑えられないか。
- ・ 学会側からは，収支の面では，水工学夏期研修会，河川技術シンポジウム，水工学講演会の 3 つで一体と見られている。ただし，イベントごとに収支をとるべき，との意見もある。

5. 次年度水シンポジウムについて（篠田成郎 幹事長）

- ・ 岐阜での開催が提案され，承認された（2012 年 7 月 26 日，27 日）

（水工学委員会，国土交通省中部地方整備局，岐阜県，岐阜市，岐阜大の主催）

- 同時期に中京圏に行事が集中することについて懸念が示された。

6. 水工学論文集編集作業について（大石哲 編集幹事長）

- 大石幹事長から、水工学論文集編集幹事会・委員会の日程が示された（10月4日、5日（第3査読者の決定）、11月7日（第1段階採否）、12月14日）。
- 編集小委員会メンバーは、水工学委員会の委員から選ばれている。
- 昨年度の収支は黒字であり、また、本年度の予算では、昨年度程度の人数の参加があれば、収支がほぼ均衡する見込みであるとの報告があった。これに対し、赤字が出ると水工学委員会の他の活動にも影響が出るので、黒字が出る程度の予算を組んだ方がよいのではないかとの意見があった。
- 11月7日の委員会は重要なので、できる限り出席してほしいとの依頼があった。
- 編集委員会に地下水・浸透関係の委員が少なく閲読作業に支障を来すので、メンバーを増やせないか、との意見があった。これに対し、委員への旅費が問題であるが、内規上は50名程度とされているので増員は可能であり、推薦を依頼することになった。
- キーノートスピーチは、小松利光先生（九大）、田中規夫先生（埼玉大）に依頼した。
- キーノートスピーチの論文について、主に土木学会論文集との関連に関わる以下のような議論があった。
 - 水工学論文集は、土木学会論文集の特別号として扱われている。
 - キーノートレクチャーの論文は、招待論文の扱いにする。
 - ページ番号は論文集編集委員会が指定した方法に従う。
 - ページ数は、4ページには限定しない。
- キーノートスピーチの論文のJ-Stageへの掲載について、以下のような議論があった。
 - これまでのキーノート論文のJ-Stageに掲載する件について、委員長より、第55回の2件のキーノートについては掲載の方向であるとの報告があった。
 - キーノートの場合、他の論文から転載することが多いので、著作権の問題（他論文集に掲載した図表など）があるのではないかと指摘があった。これについて、基本的には著者の責任であるが、J-Stageに掲載されることの意義について著者に説明する必要がある。「引用」すればよい、著者が、投稿に平行して出版社に転載を依頼してもらえばよい、などの意見があった。
 - 水工学委員会と論文集編集委員会との間で、招待論文での転載に関するルールを明確する必要がある。
- 論文集編集委員会から、Selected Paperで日本語論文を翻訳しただけのものには、Originalでないとの記述が必要であるとしており、「完全に翻訳しただけのもの」と「新たな成果を付け加えたもの」とは区別しているとの情報があった。
- 編集作業工程については、例年どおりである。
- 水工学論文集には、8月4日まで土木学会会員の資格が必要である。

7. その他

a) 土木学会B部門英文論文集について（関根正人 委員）

土木学会論文集編集委員会からの情報として、関根委員から以下のような報告があった。

- 土木学会論文集の再編作業が進行中である。
- 特集号については12月にJ-Stageにアップロードする予定であるが、ページ番号の振り方を変えた関連で、掲載時期は各委員会で決めてよく、来年度以降1月よりアップロードを早めることも可能である。

なお、英文論文集について、以下のような情報提供があった。

- 2013年1月以降、JHHEから英文論文集に移行する。
- 今年9月締切の論文の中から推薦されて英文論文となるものが最初の英文論文集の原稿になる予定である。
- 震災関連の招待論文を英文論文集に掲載したいとの意見が、引き続き議論されている。

b) 東日本大震災特別委員会 水工特定テーマ委員会（案）について（関根正人 委員）

- 土木学会東日本大震災特別委員会（委員長阪田憲次会長）は、今回の東北関東大災害を受けて、未曾有の被害を受けた河川構造物や河川関連施設等の水工関連施設について土木学

会として独自の総合的取り組みが必要と判断し、土木学会東日本大震災特別委員会のもとに「水工特定テーマ委員会」を設けることとした。

- 学会から当時の中川委員長に、水工学特定テーマ委員会の組織の依頼があった。
- 委員会のメンバーとして、おおむね調査団の核となるメンバーから選定し原案を作成したが、まだ本人への打診していない。
- 既に、複数の特定テーマ委員会が活動を開始している。津波関連は既に活発に活動している。水工学関連は他に比べて出遅れているので、早急に立ち上げる必要がある（委員長）。
- 出席者の中で、保留を希望する人以外は、了承とみなすことにしたいとの発言があり、原案の方向で承認された。
- 連絡協議会が「特別委員会」になる。

c) 水工学委員会の国際対応について（寶馨 委員長）

寶委員長より、下記のような報告および依頼があった。

- 国際委員会から、「調査研究委員会における国際活動に関する調査」について協力の依頼があった（締め切りは8月8日）。
- 調査（アンケート）の内容は、目的・方針、具体的な活動最近2年間、対応小委員会等の設置、委員会としてのMOU等の締結、委員会としての国際活動の効果、課題等である。
- 平成18年度の調査では、東南アジアの小委員会が挙げられていたが、現在は活動がないので挙げられない。
- 委員全員にアンケート回答案を送信し、加筆・修正を依頼することとした。
- 土木学会全体でまとめられ公表されるので、各自の活動をアピールにはよいかもしれない。
- 学会としての年次計画・アクションプランを踏まえて記入してほしい。

d) 調査研究部門2011年度計画について（篠田成郎 幹事長）

資料に基づき説明があり、承認された。

e) 水理公式集の改訂（篠田成郎 幹事長）

- 改訂についての議論が必要であり、委員からの意見を求めた。
- 水理公式集例題プログラム集についても改訂が必要（今後2年間で改訂できるか否か）
- 水工学委員会は、そもそも「水理公式集」を作るために編成された、との情報提供があった（水工学委員会ホームページ、「水工学委員会」の歩み参照）。

○水工学論文賞選考小委員会報告

1. 平成23年度水工学論文賞、同奨励賞候補論文について（篠田成郎 幹事長）

- 篠田幹事長より、論文集候補論文について、選考経過について説明があり、9編の候補論文の中から1位の論文を推薦することが提案され、承認された。
- 奨励賞候補論文について、選考経過について説明があり、11編の候補論文の中から1位、3位、4位の論文を推薦することが提案され、承認された。なお、2位の論文は、論文賞の候補に挙げたため、規定に従い選考対象から除外された。
- 1位、2位の点数が僅差の場合もあったが、前例に倣い、1位を推薦することにした。

次回委員会は、2012年3月6日、愛媛大学で開催予定。

以上